文円筒土器内の前後関係については，層位的に上下関係を把握できる資料が確認されていないとして，この時点ではふれていない。

（3）石坂式系土器の把握と新古２段階の細分

その後，新東は南九州縄文時代早期において大きな問題点となっていた前平式土器と吉田式土器の関係を検討する中で，石坂式土器の細分を行っている。まず「南九州の円筒土器と角筒土器」の中で，吉田式土器から石坂式土器へ変遷していく過程の土器として倉園Ｂ式土器を設定した（新東 1988）。さらに「早期九州貝殻文系土器様式」の中で「前平式系土器→吉田式系土器→石坂式系土器」という編年を示した（新東 1989）。これらはさらに細かく検討されているが，石坂式系土器は，「倉園Ｂ式土器→石坂式土器→下剥峯式土器」となっている。つまりこれは，従来の石坂式土器に該当するものの前後に倉園Ｂ式土器，下剥峯式土器をそれぞれ設定し，これら３型式をいわば広義の石坂式土器として認識しようとするものであった。

ところで，新東によって型式設定された倉園Ｂ式土器とは，器形は吉田式土器とほぼ同様であるが，「胴部文様が，斜位の条痕文から綾杉文へと変化」したものとしている。また下剥峯式土器については，「口縁部が若干広いバケツ状の円筒形を呈し，口縁部や胴部に瘤状の突起を貼付する。また，器面全体に貝殻刺突文で綾杉文を施文する」として，石坂式土器からの系譜を想定している。この土器は，かつて河口が石坂変形土器と呼んだタイプと同じで，前述のように河口もまた，石坂式土器からの変移を想定している。つまり，河口・新東両者ともに石坂式土器→下剥峯式土器（石坂変形土器）という変遷を提示しているわけである。

しかし，吉田式土器の取り扱いに大きな相違がみられる。新東の場合，吉田式土器は石坂式土器の前段階に位置づけているが，両型式の設定者である河口は，当初から石坂式土器→吉田式土器の流れを提示してきているのである（河口の場合，石坂式土器と石坂変形土器の間に吉田式土器が編年されている）。さらに河口は「吉田式と前平式のその後について」の中で，吉田式土器の細分を行い，石坂式土器にもっとも近い土器として吉田Ｉ式土器を設定した（河口 1989）。

前迫亮一は石坂式土器に関する２本の論考をほぼ同時に発表し，石坂式土器を古段階と新段階の２段階に細分した（前迫 1993a,b）。これらの中で前迫は，石坂式土器にみられる瘤状突起の出現の要因を探ることで，石坂式土器自体の変化の方向性を見いだす検討を行い，新東の編年を追認した。具体的には，瘤状突起の源流が石坂式土器の山形口縁にあるとし，「瘤状突起のみられない吉田式系土器→倉園Ｂ式土器→いわゆる石坂式土器→瘤状突起が出現する段階の石坂式土器→瘤状突起が多様化する段階の下剥峯式土器」という流れを示した。つまり，瘤状突起の出現が石坂式土器を２段階に細分する契機となるとした。

さらに前迫は，新段階の石坂式土器には，この瘤状突起出現のほかに胴部文様の多様化，口縁部直行タイプの出現といった特徴が見られることを示し，この現象を「石坂式土器の“動揺・崩壊”」という言葉で表現し，押型文土器文化との接触をその要因とした。

この押型文土器との関係については，同じ頃栄畑光博・上田耕・雨宮瑞生によって「貝殻文円筒形土器と押型文土器との関係」と題する論考が発表され，「石坂式土器と下剥峯式土器には，稲荷山式や早水台式を含む横方向施文を基調とする比較的古い段階の押型文が伴う可能性」があることを指摘している（栄畑・上田・雨宮 1993）。

近年，早期貝殻文系土器の研究を精力的に進めている黒川忠広は，石坂式土器の波状口縁を角筒土器からの系譜の中で捉えた（黒川 2000）。また，鹿児島県内の貝殻文系土器を集成し，石坂式土器が出土する97の遺跡一覧表を示した（黒川 2002）。

以上，おおよそ半世紀に渡る石坂式土器の研究史を振り返った。大きくは型式設定・編年の逆転・新古２段階の細分という流れが見えてくる。それらをふまえながら，次項では石坂式土器研究の現状と課題を整理してみたい。

3　石坂式土器研究の現状と課題

（1）編年上の位置づけについて

研究史をみるとわかるように，石坂式土器の編年は型式設定時とは異なる展開となっている。つまり，石坂式→吉田式→前平式なのかその逆なのかという問題である。

そもそも，石坂式→吉田式という編年は，型式設定時の層位学的判断から導かれている。型式設定者の河口が，吉田式土器の標式遺跡である大原遺跡の調査結果をふまえて出した結論であった。層位が型式に優先すると言うことについての異論はないが，大原遺跡の場合，基本的に両者は混在して出土しているのである。それぞれの主体が層位的に分かれるという程度では，時間的関係を示していると断定するには慎重にならざるを得ない。前後の土器型式の在り方等を考慮すると，やはり吉田式から倉園Ｂ式を介し，石坂式へ続くという編年案を指示したい。

いずれにしても，時間差を示す明確な出土状況は検出されていないのが現状である。ただ，そのことを意識しながらの調査は常に行っていく必要がある。層位学的方法と型式学方法によるクロスチェックが求められているのは言うまでもない。

（2）２段階細分の妥当性について

石坂式土器に新古の段階があることは，研究史で示したとおりである。そのことを指摘してから10年の歳月が経過した。この間，この細分の妥当性を指示するものと考えられる調査成果が公表されたので紹介したい。

①大中原遺跡（根占町教委 2000）

大中原遺跡は鹿児島県肝属郡根占町に所在する遺跡で，